

# 使徒言行録におけるバルバロイ<sup>1)</sup>

前 川 裕

## 目次

- 1：問題の所在
- 2：「バルバロス」の用法の歴史の変遷
- 3：紀元1世紀前後の用例
- 4：使徒言行録28章での用例
  - (1) 緒論的問題
  - (2) 思想的問題
    - (A) 同時代文書との比較
    - (B) 使徒言行録における宣教のスタイル
- 5：まとめ

## 1：問題の所在

使徒言行録には、28章のマルタ島漂着を巡るエピソードにおいて「バルバロス」という単語が用いられている。これはマルタ島の住民を指すことに間違いない。新共同訳聖書ではこれを「島の住民」と翻訳している。これに対して、荒井献氏は自身の日本語訳において「外人」と翻訳した<sup>2)</sup>。ここには「社会的な区別の意識が存在している」というのがその理由であり、新共同訳の翻訳ではその点があきらかでないという。そして、この単語の使用状況から、ルカが「ヘレニズム的な世界市民意識」によっていること、また「ローマにおける重要な地域にのみ宣教」しているという状況等から、ルカはギリシア語を話すものとしての優位意識をもっていたと論じている<sup>3)</sup>。この点について

は加藤隆氏も賛意を表し、「社会文化的な差別語」として「バルバロス」が用いられていたと述べている。<sup>4)</sup>

しかし、本当にルカはギリシア語文化の優位を感じ、それ以外の言語を話す人々に蔑視感を抱いていたのであろうか。

本小論においては、「バルバロス」が紀元1世紀前後にどのような意味で用いられていたのかを考察し、ルカがどのような意識でこの単語を用いていたかについて再検討する。

## 2: 「バルバロス」の用法の歴史の変遷

「バルバロス」は、ホメロスの時代から用例が見られる古典的なギリシア語である。<sup>5)</sup> 本来の意味は「よく分からない言葉を話す者」であり、特に、ペルシア戦争においてペルシア人たちを指して用いられている。対になる言葉として「ヘレネー」があり、これはギリシア人たちの共同体意識を示している。いわゆる「蔑視」の観念が入っているのはこの時期であり、これは「ポリス」に代表される閉鎖性によっている。ギリシア人たちは、自らの文化的優越を誇るが、その文化を他の民族に提供し、文化的支配圏を拡大しようとする考え方はなかった。<sup>6)</sup>

紀元前146年のローマによるマケドニア征服とそれに続いてギリシア地域の支配が始まった後にも、ギリシア文化のローマに対する優位は続いていた。<sup>7)</sup> 本来「ギリシア語を話すもの」を意味した「ヘレネー」は、ローマの覇権確立後は、ローマ人をも含んでいくようになる。ローマ人たちは盛んに自らの起源をギリシアに求め、自分の家系の古さ・文化の高さを競うようになっていく。ここにおいて、「ヘレネー」は「ギリシアの文化に属するもの」という意味を獲得していく。「ヘレネー」概念にローマが含まれるようになると同時に、「バルバロス」は、ギリシア・ローマ以外の民族を指すようになったが、しかし、征服によってポリスの力が衰えると、ギリシアー非ギリシアの違いを強調する考えは廃れていった。<sup>9)</sup>

使徒言行録もこの時代に属する作品と見ることができる。いくつかの研究

では、ディオニュシオス・ハルカリナッソスの著作を引いて、ヘレニズム的なギリシア文化優位意識を論じている<sup>10)</sup>。しかしそれだけが当時の論調ではないことが以下の考察から見受けられる。

### 3：紀元1世紀前後の用例

当時のギリシア語著作家たちの用例を見てみると、いくつかのパターンが見受けられる。ここで検討するのは、ストラボン(64BCE-21CE?)、シチリアのディオドルス(BCE 1世紀：『世界史』は60BCE-30BCE頃)、ハルカリナッソスのディオニュシオス(30BCE以前-?)、アレクサンドリアのフィロン(35BCE-41CE)、フラヴィウス・ヨセフス(37CE-100CE)、プルタルコス(45CE-120CE)の著作である<sup>11)</sup>。

これらの文献が意味する「バルバロイ」の内実は実にさまざまである。ギリシアから見たペルシア、トロイア戦争におけるトロイア側、エジプト、リビア、シリア、パルティア、カルタゴ、アラブ地方の住民、といった中近東から、ヨーロッパではローマに対するガリア人、シチリアの住民、エトルスキなどのイタリア土着の民族などを指している。自分の所属する民族について、自らを蔑視的に述べるような用例は見受けられない。

これらの多様な内容は、以下のように分類できる。

#### (1) 古典ギリシア的な「敵」という意味

この意味では、(2)におけるような「蔑視」を含むことが多い。ペルシア、トロイア、パルティア、カルタゴ、ガリア人などが「バルバロイ」と呼ばれている。これらは、明らかに戦争の文脈で出てくるものである。ギリシア人もローマ人もユダヤ人も自らに敵対する民族を「バルバロイ」と呼んでいる<sup>12)</sup>。

#### (2) 蔑視を含めて「外国人」という場合

これは、戦時という状況以外で明らかに蔑視の観念を含んでいるものである。ガリア人やイタリア土着の民族を指すことが多いが、実際に特定の民族

を指し示していることは少ない。著者にとって奇異な風習や習慣などを取り上げ、いわゆる「蛮人」「未開人」といったカテゴリーに属するといえる。

Strabo, *Geographia*, 11.11.8:

Ἐπιμνηστέον δὲ καὶ τῶν παραδόξων ἐνίων ἃ θρυλοῦσι περὶ τῶν τελέως βαρβάρων, οἷον τῶν περὶ τὸν Καύκασον καὶ τὴν ἄλλην ὄρεινὴν.

まったくの「未開人」、たとえばカウカソス山脈をはじめそのほかの山地一帯の住民について繰り返し述べられる奇談のいくつかについても、さらにふれなければならない。…

また、バルバロイは劣ったものであり、ヘレネーに支配されるべきものである、という用例も多く見受けられる。

Dionysius Halicarnassensis, *Antiquitates Romanae*, 14.6.5:

τὸ γὰρ Ἑλληνικὸν οὐκ ὀνόματι διαφέρειν τοῦ βαρβάρου ἡξιούον οὐδὲ διαλέκτου χάριν, ἀλλὰ συνέσει καὶ χρηστῶν ἐπιτηδευμάτων προαιρέσει, μάλιστα δὲ τῷ μηδὲν τῶν ὑπὲρ τὴν ἀνθρώπινην φύσιν (εἶς) ἀλλήλους παρανομεῖν. ὅσοις μὲν οὖν ταῦτα ἐπὶ πλείον ὑπῆρξεν ἐν τῇ φύσει, τούτους οἶμαι δεῖν λέγειν Ἑλληνας, ὅσοις δὲ τάναντία βαρβάρους.

なぜなら、私はバルバロイからヘレネーを、その名前や言葉だけではなく、彼らの知性や上品な振る舞いへの好み、そしてとりわけ、お互いに非人間的な扱いをしないことにおける寛大さによって区別するのである。これらの性質を持っている人達はヘレネーと呼ばれるべきであり、その反対の人達をバルバロイと呼ぶべきであると私は考える。

これは古典ギリシア時代からの用法を引き継いでいるものであるといえる。

## (3) 一般的に「外国人・現地の住民」をさす場合

上の二つに対して、平時の文脈で、しかも蔑視を含むとは言いがたい用例も数多く存在する。この場合、実質的には「ギリシア語を解さないもの・ギリシア文化とは異なる文化に所属するもの」という内容であるといえる。

Josephus, *Contra Apionem* 1.58:

ικανῶς δὲ φανερόν, ὡς οἶμαι, πεποικῶς ὅτι πάτριός ἐστιν ἢ περὶ τῶν παλαιῶν ἀναγραφῇ τοῖς βαρβάροις μᾶλλον ἢ τοῖς Ἑλλησι, βούλομαι μικρὰ πρότερον διαλεχθῆναι πρὸς τοὺς ἐπιχειροῦντας νέαν ἡμῶν ἀποφαίνειν τὴν κατάστασιν ἐκ τοῦ μηδὲν περὶ ἡμῶν, ὡς φασιν ἐκεῖνοι, λελέχθαι παρὰ τοῖς Ἑλληνικοῖς συγγραφεῦσιν.

私は思うに、古代の記録を保持するという伝統はヘレネーよりもバルバロイにおいてよりよく示されており、まず私は、我々に関してヘレネーの歴史家たちが沈黙していることを証拠として我々の起源の新しさを証明したがっている批評家たちに簡明に答えたいと思う。

この例では、「ギリシア人よりも蛮人の方によりよく歴史が記録されている」では不可解な訳となる。これは明らかに「外国人」とすべきものであろう。ロエブの英訳ではこれを non-Hellenic races と訳している。<sup>13)</sup>

Strabo, *Geographia*, 9.2.25:

εἶρηται δ' ὅτι τῇ Βοιωτίαν ταύτην ἐπώκησάν ποτε Θρᾶκες βιασάμενοι τοὺς Βοιωτοὺς καὶ Πελασογοὶ καὶ ἄλλοι βάρβαροι.

…トラキア族はかつてボイオティア人を武力で圧倒した後、このボイオティア地方に移り住み、ペラスゴイ族（ギリシア全域にいた古代の一種族：兵士として名声を獲得した cf.5.2.4）をはじめそのほかのバルバロイも移り住んだ。…

ギリシア土着の民族に対しても「バルバロイ」という言葉が用いられている。これは「バルバロイ」が文化的なものに関連していることを伺わせる。

では、「バルバロイ」の文化は劣っているのでしょうか。

Strabo, *Geographia*, 1.4.9:

Ἐπὶ τέλει δὲ τοῦ ὑπομνήματος οὐκ ἐπαινέσας τοὺς δίχα διαιροῦντας ἅπαν τὸ τῶν ἀνθρώπων πλῆθος εἰς τε Ἑλληνας καὶ βαρβάρους, καὶ τοὺς Ἀλεξάνδρῳ παραιοῦντας τοῖς μὲν Ἑλλησιν ὡς φίλοις χρῆσθαι τοῖς δὲ βαρβάροις ὡς πολεμίοις, βέλτιον εἶναι φησιν ἀρετῇ καὶ κακίᾳ διαιρεῖν ταῦτα. πολλοὺς γὰρ καὶ τῶν Ἑλλήνων εἶναι κακοὺς καὶ τῶν βαρβάρων ἀστείους, καθάπερ Ἰνδοὺς καὶ Ἀριανούς, ἔτι δὲ Ῥωμαίους καὶ Καρχηδονίους οὕτω θαυμαστώως πολιτευομένους.

(エラトステネスは) その叙述の終わりで、人間の集団を全体としてヘレネーとバルバロイに二分する人びとや、アレクサンドロスに向かってヘレネーを友としバルバロイを敵として扱うよう勧めた人々を、決して誉めようとせず、むしろ徳と悪徳によって分ける方がよい、と述べている。著者によると、ヘレネーにも悪人は多く、またバルバロイにもりっぱな市民は多い、たとえばインド、アリアノイ両族やローマ、カルタゴ両市民などがそれで、驚くほどの政治組織を持っている。…

これは、必ずしも「バルバロイ」が文化的に劣っているわけではないことを述べている。<sup>14)</sup> ヨセフスの次の記述も同じことを述べているといえる。

Josephus, F., *Judaicae Antiquae*, 1.107-108:

μαρτυροῦσι δέ μου τῷ λόγῳ πάντες οἱ παρ' Ἑλλησι καὶ βαρβάροις συγγραψάμενοι τὰς ἀρχαιολογίας· καὶ γὰρ καὶ Μανέθων ὁ τὴν Αἰγυπτίων ποιησάμενος ἀναγραφὴν καὶ Βηρωσὸς ὁ τὰ Χαλδαϊκὰ συναγαγὼν καὶ Μῶχος τε καὶ Ἑστιαῖος καὶ πρὸς τούτοις ὁ Αἰγύπτιος Ἰερώνυμος οἱ τὰ Φοινικικὰ συγγραψάμενοι συμφωνοῦσι τοῖς ὑπ' ἐμοῦ λεγομένοις, Ἡσιόδός τε καὶ Ἐκαταῖος καὶ Ἑλλάνικος καὶ Ἀκουσίλαος καὶ πρὸς τούτοις Ἐφορος καὶ Νικόλαος ἱστοροῦσι τοὺς ἀρχαίους ζήσαντας ἔτη χίλια.

なお、わたしのこのような立言は、ヘレネー、バルバロイを問わず、古代史を著したすべての者によって証言されている。すなわち、エジプトの年代記の編者マネトーン、カルデア史の編者ベーローソス、フェニキア史の著者モーコスとヘスティアイオス、さらにエジプト人のヒエロニューモス等によっても裏付けられており、また、ヘシオドス、ヘカタイオス、ヘラニコス、アクシラオス、さらにエフォロスやニコラオスにいたっては、古代人が1000年も生きのびたと報告している。

また、「ヘレネーとバルバロイ」という語句が一種の成句のように「全世界」を意味するものとして用いられている例は数多い。上のヨセフスの引用もその一種といえる。

明確ではないところはあっても、ほぼ以上のような3つの意味に分類できる。すなわち、古典ギリシア的な「軽蔑」の意味を含む場合のほかに、一般的に「外国人」を指す用例も生まれてきている。これらは文脈において判断すべきものであろう。

#### 4：使徒言行録28章での用例

##### (1) 緒論的問題

###### ・マルタ島の概況

ここではマルタ島の住民に対して用いられている。多くの注解者が指摘しているように、<sup>15)</sup>ここではフェニキア語が用いられていたと考えられる。すなわち、パウロたちから見れば「ギリシア語を話さない者＝バルバロイ」である。さらに、パウロは島の長官に面会する。名前から判断すると、彼はローマ人であったらしい。<sup>16)</sup>パウロたちと何語で会話したかは定かではない。

マルタは、地中海における東西交流の基点であった。良港の存在がそれを助けている。ここでは、カルタゴ語とともにギリシア語も広く用いられていたらしい。<sup>17)</sup>さらにマルタ島には公式の碑文として、ラテン語で書かれたもの

が残っている。<sup>18)</sup>

また、当時ローマ領の西部ではラテン語が用いられていたが、それ以外はギリシア語が普通であった。ローマの上流階層は自由にギリシア語を用いることが出来た。<sup>19)</sup>

このような事実から考えると、非常に高度なものではなかったにせよ、マルタ島には一定のレベルの文化が存在していたと考えるのが妥当である。

#### • 28章の史的問題

28章のエピソードは、史的にはどうであったのであろうか。この部分は実際内容が曖昧であり、注解者たちも説明に苦勞しているところである。この部分は「我ら」資料に属し、文体の研究からは、ルカのテキストとして大きな異論はない。<sup>20)</sup>ヘビを巡るエピソードも、古代文学では一般的なものである。<sup>21)</sup>ダンはこのエピソードについて、「ルカが自分の視点で用いているが、加筆は僅かであろう」と考えている。<sup>22)</sup>ここでは、この物語は現在残されている形で起こったものとする。仮に著者の創作とみなすならば、ヘビのエピソードや住民の言葉など、かえってその意味を汲むことが難しくなる。ダンの見解に従い、著者による加筆はあるものの、全体としては史実を反映していると見なす。

## (2) 思想的問題

#### • パウロはなぜ宣教しなかったのか

ここでパウロが「バルバロイ」に対して宣教を行っていないことが、荒井氏の挙げる論点の一つである。しかし、ここでは住民のみならず、長官に対しても明らかな宣教は行われていない。彼は父をパウロによって癒してもらうが、そのために「信仰に入った」とは述べられていない。

さらに、真に「バルバロイ」であるなら、なぜこのような記録があるのか、ということが問題となる。住民の言葉は誰が記録したのであろうか。

一つの解答は、このエピソードの力点がどこにあったかを考えることによ



って得られる。ダンはこの部分を、パウロの罪に対する神の判決であるとルカが考えていた、という<sup>23)</sup>。即ち、パウロはここでは反論をしていないが、ルカは使徒言行録のそれまでの部分のような神として崇められることへの反対をやめたわけではない。ここはパウロが神に選ばれたもので、神の言葉を伝えるにふさわしいものであることを示すためのエピソードである、という。タルバートも同様に、27—28章は神によるパウロの無罪性の主張であり、神の計画はなにものにも妨げられないことを示すものであると論ずる。<sup>24)</sup>

また、最近注目される論考として、使徒言行録は異邦人向けではなくユダヤ人に向けて書かれた文書である、という説がある。<sup>25)</sup>これによると、パウロたちは旅先のシナゴグを基地として宣教しており、宣教の対象は主にユダヤ人であったために、「バルバロイ」たちには宣教しなかった、となる。しかし、アテネではパウロたちはギリシア人たちにも宣教しており（使徒17章）、この説によって結論付けることはできない。

・ルカは「ヘレニズム作家」であったのか

ルカは「ヘレニズム作家」（プリューマツハー）というグループに入るといえるであろうか。確かにルカはギリシア語で執筆し、宛名もローマ人向けになっている。しかし、そこに「ギリシア意識＝ヘレネー意識」があったといえるであろうか。

確かにルカは「バルバロイ」という語を用いることで、自分たちと「島の住民」たちとの間に一線を引いている。つまり、島の住民はギリシア人・ギリシア語を話す人たちではない。しかし、そこからすぐに蔑視意識を見いだすことが出来るだろうか。

## (A) 同時代文書との比較

(ルカ文書における「外国人」を表す言葉)

「外国人」をあらわす言葉は、ルカ文書には幾つか現れる。

「クセノス ξένος」という単語は、ルカ福音書には出てこず、使徒言行録には3回出てくる。(17:18; 21, 28:23) これらは「他国を旅行する者」とい

う意味である。さらに動詞形で5回現れる。(10:6;18:32, 17:20, 21:16)これは1回を除いて「宿泊する」意で用いられている。<sup>26)</sup>

「アッロゲネース ἄλλογενής」はルカ17:18のみに現れる。ここでは「サマリア人」を指している。

「アッロフェロス ἄλλοφύος」は使徒10:28に現れる。これは新約では唯一の例だが、古典の著作にも用例がある。ユダヤ人が交際を禁じられている対象としての「外国人」である。ここでは直接にはコルネリウスを指すが、交際を禁じられているものとしてはローマ人一般を指すと考えられる。<sup>27)</sup>

「エトノス ἔθνος」はルカ文書では単に「外国人」を指すのみでなく、「サマリア人」(使徒 8:9)、「同胞 (私の民=ユダヤ人)」(使徒 24:17, 26:4, 28:19 etc.)などを指す用法がある。

このように、ルカ文書では「外国人」を表すのにいくつもの表現を用いている。では、なぜマルタ島の住民に対して「バルバロイ」を用いたのであろうか。3章で考察したように、この時代には「バルバロイ」は文化的程度の差を表さず、「ギリシア文化に属するか否か」ということを示すだけの言葉としても用いられていた。ここから、「文化的差別用語」という批判はかならずしも正しくないといえる。

さらに注目すべき用例として、以下のようなものがある。

Diodorus Siculus, *Bibliotheca Historiae*, 5.16.3:

κατοικοῦσι δ' αὐτὴν βάρβαροι παντοδαποί, πλεῖστοι δὲ Φοίνικες.

その地(エレスス、サルディニア)の住人はさまざまな国籍のバルバロイから構成されているが、フェニキア人が多数である。

ここではフェニキア人も「バルバロイ」のひとつであるといわれている。また別の例では、

Philo of Alexandria, *De Josepho*, 134:

μάρτυρες τῶν ἐνυπνίων οὐκ ἄνδρες μόνον, ἀλλὰ καὶ πόλεις, ἔθνη,

χωραι, ἡ Ἑλλάς, ἡ βάρβαρος, ἡπειρώται, νησιώται, ἡ Εὐρώπη, ἡ Ἀσία, δύσις, ἀνατολή.

これらが夢である、ということは、ひとつの人間だけでなく町や民族や国においても、ヘレネーだけでなくバルバロイの世界においても、陸の住民だけでなく島の住民においても、ヨーロッパだけでなくアジアにおいても、西洋だけでなく東洋においても当てはまるのである。

ここでは、「ヘレネーとバルバロイ」に対応する組み合わせとして「大陸の住民と島の住民」が対置されている。これらはルカの用法を考える上で大変興味深いものである。

使徒行伝におけるパウロ一行は明らかに「大陸の住民」であった。そして、マルタ島にすむ人々は「島の住民」である。文化の程度という差異ではなく、この対比が当時の共通理解としてあったとすれば、ルカが「島の住民」に対して「バルバロイ」を用いたのはむしろ自然なことであったといえる。

## (B) 使徒言行録における宣教のスタイル

### ・使徒言行録14章との比較

多くの注解者が比較としてあげているのが、使徒言行録14章におけるリストラでの出来事である。リストラでは、「リカオニアの方言」<sup>28)</sup>を話す人々がパウロを神として祭り上げようとし、これにたいしてパウロたちが反論する、という場面である。

14章では、「神」とされたことに対して、パウロたちは明確な反論を加えている。ところが28章ではこの反論部分がないのが特徴である。このままでは、パウロは「この人は神だ」という「バルバロイ」の発言を認めることになってしまう。<sup>29)</sup>

28章の場合は、島の人々皆がギリシア語を解したわけではなかったらしい。少なくとも、日常的にはフェニキア語を用いていたわけである。パウロたちはその言葉に接し、「この人たちはギリシア語を話さない＝バルバロイであ

る」と考えたわけであろう。

#### ・パウロ自身の用例

真正のパウロ書簡において、「バルバロイ」はロマ1:14、1コリ14:11（2回）に出てくる。<sup>30)</sup>青野太潮氏は自身の日本語訳において、ローマ書のを「非ギリシア人」、コリント書のを「外国人」と訳し、脚注においてこれが「バルバロイ」であることを指摘している。<sup>31)</sup>

ローマ書の例は、「ヘレネーとバルバロイ」で「全世界」を示す用例と一致している。またコリント書の例は「言葉が解らない」とパウロ自身も「バルバロイ」であると言っており、そこに蔑視の観念があるとはいえない。<sup>32)</sup>

パウロ自身は「バルバロイ」を蔑視的な用法で使っているわけではないといえる。これが使徒言行録の著者に影響したことは十分ありうる。この点からも、使28章の「バルバロイ」が蔑視的でないと言うことができよう。

#### ・使徒言行録での宣教のスタイル

使徒言行録では、宣教において言葉がつくのが一般的である。<sup>33)</sup>もちろん「不思議なわざ（使徒2:43）」も行われているが、それに意味の説明がつくことがよくある。<sup>34)</sup>すなわち、ルカの考えでは「言葉」による宣教が大事な点として考えられていたようである。これは「しるしだけではいけない」といったイエスの言葉とも一致する。

ところで問題の28章では、住民とは言葉が通じない状態にあった。ルカの考える宣教のための条件は整っていなかったのである。島の住民とは、「会話」をしていない。住民たちの言葉が一方向的に記録されているだけである。さらに、長官とも会話をしていない。パウロが祈った、とあるが、これは住民、さらに長官にしてみれば単なる呪文と変わりがなかったであろう。結局ここでは彼らは宣教の手段を持たなかったのである。してみれば、パウロが宣教しなかったのも当然であると考えることができよう。

## 5:ま と め

「バルバロス」という言葉は、古典期の「蛮族」というイメージがあまりに強く印象づけられており、すべてをこの視点から解釈してしまいがちである。しかし、紀元1世紀前後の作家においては古典ギリシア語とは変化した意味を与えられてきている。同じ時期に属するルカの著作においても、単純に「バルバロイ＝文化的に劣った異国人」という概念が成り立つとはいえない。むしろ、単に「ギリシア語を話さないもの」という意味である、と考えるほうが正当であるといえる。

荒井氏が指摘するように、ルカが自らを「ヘレネー」に属するものと考えていたことは間違いないように思われる。しかし、そこに「優位意識」があったか、という点については、この単語だけでは結論付けることはできない。この語が文化的な差別用語として用いられているかどうかについては、文脈その他からの総合的な検討が必要である。

結論として、使徒言行録のこの部分での「バルバロイ」には「社会文化的な差別意識」は働いてはいないと見なすことができる。むしろ、「ギリシア語を解さない者」という程度の意味に過ぎないと推測される以上、「外人」といった含みを持たせた言葉を用いる必要はないといえる。<sup>35)</sup>

いくつかの似た用例が同時代の文書にあったことを考えると、ここでの訳語は「(島の)住民」という新共同訳の方がより適切である、といえよう。<sup>36)</sup>

## 注

- 1) 本論文は第39回関西新約聖書学会研究発表会(1998年6月15日、梅花女子大学)にて口頭発表したものに加筆修正したものである。
- 2) 荒井献訳「使徒行伝」、『新約聖書Ⅱ—ルカ文書』、岩波書店、1996。
- 3) 荒井献「使徒行伝解説」、『新約聖書Ⅱ—ルカ文書』、岩波書店、1996、293-303頁；荒井献「『新約聖書』新訳の意義とその特徴」、『言語』第26巻第12号、大修館書店、1997、62-69頁。
- 4) 加藤隆「『新約聖書Ⅱ—ルカ文書』について」、『新約学研究』25、1997、31-35。
- 5) 以下の記述は、主に Windisch, H., Βάρβαρος, in: Kittel, G. (ed.), *Theological*

*Dictionary of the New Testament*, Vol.1, Grand Rapids, Michigan, 1964, 546-553; Balz, H.; Schneider, G. (ed.), 荒井猷他訳『ギリシア語新約聖書釈義事典』第1巻、教文館、1994によっている。

- 6) 藤縄謙三、「世界史の青年期としての古代ギリシア」、藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』、南窓社、1993、42-43頁。
- 7) ローマの教育においては、ギリシア語がラテン語と同様、あるいはそれ以上に重んじられていた。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスが『自省録』を、自らの覚え書きであるにも関わらずギリシア語で書いたのは有名な話である。cf. Marrou, H. I., (横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳)『古代教育文化史』、岩波書店、1985、278-320頁、特に308-320頁; 南川高志、「ローマ帝国とギリシア文化」、藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』、南窓社、1993、77-108頁。
- 8) 例えば、ヴェルギリウスの『アエネイス』にもそのような思想が現れている。
- 9) 高島純男、「古代ギリシヤの外人観」、弓削達・伊藤貞夫編『ギリシヤとローマー古典古代の比較史的考察』、河出書房新社、1988、319頁。
- 10) 例として、Plümacher, E., *Lukas als hellenistischen Schriftsteller: Studien zur Apostelgeschichte*, Göttingen, 1972, 21.
- 11) 各著者の「バルバロイ」に対する一般的な考えを見ておきたい。ストラボンについては注14で指摘している。

ディオドルスでは、各地方に住む民族を指して用いる例が多い (Bibliotheca Historica 3.15.2 (アラビア地方); 3.23.1 (エチオピア); 5.15.1 (サルジニア); 14.72.3 (シラクサ) など)。特に、敵対する場合によく「バルバロス」と呼ばれている (同 13.59.9 (カルタゴ) など)。

ディオニュシオスでは、強力な蔑視が常に見られる (Antiquitates Romanae 1.4.2; 14.10.1 など)。

フィロンでは、蔑視的な用例も目立つ (De Abrahamo 136; De specialibus legibus 1.313, 3.163; Quod omnis probus liber sit 34; Legatio ad Gaium 147; De providentia frag.2. 66 など) が、その他は「ヘレネーとバルバロイ」という定型的な表現である。フィロンにおいては、「ヘレネー」と「バルバロイ」の区別を強調するよりも、「ヘレネー」「バルバロイ」ともに…である、という論調が目立つ (例えば De Abrahamo 267.7; Legatio ad Gaium 102.3 など)。

ヨセフスでは、「バルバロイ」で意味するのはほとんどがエジプト (Antiquitates Judaicae 2.263 など) とパルティア (同 14.343, De bello Judaico 7.1.261 など) である。特に後者については「敵」の意味が強い。その他「ヘレネーとバルバロイ」で「全世界」を意味する例がある (De bello Judaico 7.6.199)。

ブルタルコスでは、蔑視の用例も散見される (De sperstitione stephanus 171 B; De fortuna Romanorum 320C など) が、特にその意味を込めない例も多い (De Alexandri magni 344C など)。

- 12) 例えばヨセフスでは、『ユダヤ戦記』7.4.240でイドマヤ人を「バルバロイ」と呼び、

- 同7.7.86ではドミティアヌス帝に敵対するゲルマン人達を「バルバロイ」と呼んでいる。
- 13) Thackeray, H. St. (trans.), Loeb Classical Library, Harvard University Press.
  - 14) もっともストラボン自身は、続く部分でこの見解に反対している。ストラボン自身は古典的な意味で「バルバロイ」を捉えていたようである(例として、Geographica 4.1.5; 11.11.8など)。飯尾都人訳(『ギリシア・ローマ世界世誌』、龍溪書舎、1994)でも、「バルバロイ」に「未開人」「異種族民」「非ギリシア民」といった複数の訳語をあてている。
  - 15) Cadbury, H. J., *The Book of Acts in History*, 1955, 24; Mussner, F., *Apostelgeschichte* (Neue Echter Bibel), Echter Verlag, 1984, 155 etc.
  - 16) もっとも、彼はローマ市民権を持つにすぎない者であって、「ローマ出身」というわけではない。パウロもローマ市民権を持つという点では「ローマ人」といえる。
  - 17) Cadbury, 24; Haenchen, E., *Die Apostelgeschichte*, V&R, 1956, 646.
  - 18) Corpus Inscriptionum Latinarum 10.7495; Cadbury, 23.
  - 19) 高津春繁『古典ギリシア』、筑摩書房、1964、110頁; cf. 南川高志「ローマ人の社会と教育」、『ユスティティア』第1号、1990、163頁。
  - 20) Haenchen, 646.
  - 21) Cadbury, 25; Talbert, 221. ムスナーはこれを「キリスト教的でない奇跡物語」と評する(Mussner, 155)。
  - 22) Dunn, J. D. G., *The Acts of the Apostles* (Narrative Commentaries), Trinity Press, 1996, 344.
  - 23) Dunn, 345-347.
  - 24) Talbert, C. H., *Reading Acts. A Literary and Theological Commentary on the Acts of the Apostles*, Crossroad, New York, 1997, 215; 222-223.
  - 25) Cf. Jervell, J., "Retrospect and Prospect in Luke-Acts Interpretation," *SBL 1991 Seminar Papers*, SBL, 1991, 383-404.
  - 26) 17:20では「奇妙なこと」(新共同訳)「新奇なこと」(荒井献訳)の意味。「変わったこと」の意味で用いられている。
  - 27) ここでは「異邦人(エトノス)」という言葉が避けられているという見解がある(真山光彌「使徒言行録」、『新共同訳新約聖書注解』I、日本基督教団出版局、1991、591頁)が、ルカ文書における「エトノス」の用法は独特であり、注意する必要がある。
  - 28) 「リカオニアの方言」とは何を指すのか曖昧であるが、「フォネー」という語が使われていること、またパウロが出ていって人々を説得していることを考えると、これはギリシア語の方言の一つであったと考えられる。結局、ここではパウロはギリシア語を用いているわけである。となれば、相手との言語の上での障害はなかったといえる。

- 29) タルバートはこれについて、8節でパウロが祈りを捧げることに注目し、神であれば祈る必要はないのであるから、この祈りはパウロが神でないことを証明している、という (Talbert, 222)。しかしこれは一神教的な発想である。古代ギリシア神話・文学においては、神々がお互いに嘆願することはごく普通に見られる。「祈らなかった」といって「神ではない」ということに直結はできない。
- 30) さらにコロ3:11にも用例がある。ここでは「スキタイ」と並んで称される。
- 31) 青野太潮訳『パウロ書簡』、「新約聖書IV」、岩波書店、1996。
- 32) この点で、コロサイ書の用例とは対照的である。cf. 注30。
- 33) 使徒言行録の特徴は、パウロとペトロの定型化された説教にある。これも言葉重視の現れといえる。
- 34) 例えば使3章。
- 35) 「外人」という現代日本語の持つ意味内容についての議論はここでは避ける。
- 36) 口語訳聖書ではこれを「土地の人々」と訳している。これはRSV (natives) の訳の影響と考えられるが、最近の翻訳においても、フランス語訳 (TOB, 1991) では les autochtones (土着の人々、先住民)、ドイツ語訳 (Die Bibel, Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift, 7. Aufl., 1992) では Die Einheimischen (その土地固有の人々) と訳している。伝統的な「バルバロイ」という差別的な意味を打ち消すような方向で訳されていることが伺える。新共同訳もこれらに沿ったものであるといえる。